

延命地藏尊の由来

香象院住職 四之宮 弘孝

新編武蔵風土記稿によると「阿彌陀堂、山下二テ字峯ノ下ニアリ。香象院ノ持。」と記されていて山下の地に阿彌陀様を本尊としてお祀りしたお堂があったことがわかります。山下の地名は「山下のお地藏様」「山下の交番」と、現在も山下の呼称があり、だいたい宮田町二丁目、三丁目あたりの山際の一帯の字名であったと思われる。今の延命地藏尊の境内はずい分狭くなっていますが、当時はずっと広く、そこに阿彌陀堂が建っており、その傍らに三体の地藏尊がお祀りされていたのではないかと想像いたします。

現在延命地藏尊にはこの地から出土したお墓の原形とも言える板碑が数点保存されており、その一片には文明十二年（一四八〇年）の刻銘があり、裏山の一帯は鎌倉、室町時代の古くよりずっと埋葬所として存在していたことを物語っております。特に江戸時代は投込み場であったことが伝えられており、投込み地藏の呼称もあります。現地藏堂建築のさいに地藏尊の下から数多くの枯骨が出土しました。投込み場は東海道を往来する旅人が、病氣等で死亡した時に、その遺体を埋葬した場所です。境木の地藏尊にも投込み場があったとされています。仏教では亡くなった人のために仏像を造立して供養いたします。江戸時代のお墓には仏様の刻まれた石塔が数多くありますので、この延命地藏尊は、保土ヶ谷の宿へ来て旅の途中で亡くなった無縁の多くの人達の霊を永く供養しようとする目的で、宿場の住人がお互いに協力し合って建立したのだと考えます。

いつの時代か阿彌陀堂は廃絶し、本尊阿彌陀如来は香象院の方へ安置したとされ、地藏尊だけが残りました。元禄四辛未一月十七日宗心法師、印覚法師と刻銘のある一体、台石に碑六十六部廻国塔（帷子町願主法印休心）とある一体、もう解読できない一体と、その他に六角塔（輪応宗直法師）と現在造立の水子地藏尊観音像・無縁

供養塔が祀られています。

ところで、保土ヶ谷宿では万治三年（一六六〇年）に東海道が改修され、その位置が変わりました。（「保土ヶ谷ものがたり」）それまでは浅間神社の前の道が山際にそって延命地藏尊の所に来て神戸町の神明神社に向って通ずる道でした。それは天王町と神戸町の境の元の帷子川にかかっていた橋を古町橋と呼んでおりましたし、近辺を古町と言っていたことから推察できます。古町の名は新町に対する呼称で、この道路が当時元の東海道であったことを示しております。新町の名は帷子橋を描いた江戸時代の版画の一つに「新町入口」の文字が見え、現在の岩間町一丁目あたりをそう呼んでいたのだと聞いたことがあります。そうして松原から本陣へ向っての真直な道路がその後の東海道となりました。ですから万治三年以前はちょうど延命地藏尊の所が八王子街道の分岐点であっていわゆる追分であったこととなります。追分の言葉は幹線道路が分岐する地点を言い、由来は馬子が分れ道にさしかかると馬の群をそれぞれの道に追いつけたことに拠ります。そこで、東海道・八王子街道を往来するおおぜいの旅人達が、この阿彌陀堂を参拝し、旅の安全と国の家族の安泰とを祈願してここで一休みしたことでしょう。また新町ができてから後も三体の地藏尊はいつしか延命地藏尊と呼ばれる様になり霊験あらたかなる仏様として宿場の住人はもとより街道を旅する人達の篤い信仰を集めてきました。現在は新たに堂宇が再建され、息災延命水子供養のお地藏様として縁日の四日、四日には地域の方々はじめ遠方からもたくさんのお詣りがあります。

参考文献

保土ヶ谷郷土誌 磯貝 正著
保土ヶ谷ものがたり

土に探す

磯貝 長吉著